



富山県における縄文時代石製装身具

山本 正敏（財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）

1. 早期末葉～前期

草創期～早期後葉は、遺跡の発掘例自体が少ないこともあって、石製装身具は確認されていない。早期末葉になって滑石・蠟石製の玦状耳飾や各種垂飾品の、製作と使用が確認できる。上市町極楽寺遺跡が代表的な製作遺跡である。同時期の朝日町明石A遺跡や立山町天林北遺跡などでも玦状耳飾の製作が行われている。初期の玦状耳飾の製作工程は、最初に原石を荒割りし、調整剥離と研磨を加えて円盤状のものを作る。続いて穿孔し、擦切りによって切れ目を入れて完成する。

玦状耳飾は、徐々に形態を変化させながら、前期を通じて作り、使用される。朝日町柳田遺跡は前期後葉の製作遺跡であるが、製作方法は極楽寺遺跡に比べると大きく変化し、円盤状素材への穿孔前あるいは穿孔作業と平行して切れ目を入れる工程となっている。これは切れ目のみ施されている製作初期段階の資料のほかに、穿孔部の上側（切れ目の反対側）にまで切れ目の跡が残っている資料で確認できる。

射水市（旧小杉町）南太閤山Ⅰ遺跡では指貫型を含む玦状耳飾のほか、前期初頭の異形垂飾品が出土している。石製装身具の種類としては、そのほかに管玉状のものや様々な形態の垂飾品がみられるが、形態分類とその消長の検討は充分なされていない。装身具の中に含まれると考えられるものに、立山町吉峰遺跡、朝日町柳田遺跡などから出土している、有孔磨製石斧（玉斧）がある。薄い磨製石斧状の体部の基部近くに穿孔されるもので、東北地方などにみられるような、先端が二股になるものや靴べら状のものはまだ見つかっていない。

2. 中期

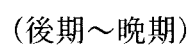
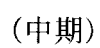
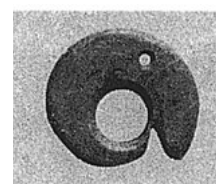
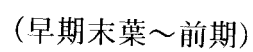
玦状耳飾は朝日町馬場山D・G遺跡などで中期前葉まで残る。また馬場山G遺跡では中期前葉にヒスイ製の玉類を製作し始める。中期中葉以降になると、ヒスイ製の太珠が出現する。いずれも表採品であるが、氷見市朝日貝塚、富山市北代遺跡、南砺市（旧平村）下梨遺跡などで鯉節型の太珠が発見されている。境A遺跡や糸魚川周辺の生産遺跡からもたらされた優品である。

拠点的な集落遺跡では、その他に滑石や蛇紋岩などを用いた各種垂玉類が出土する（立山町二ツ塚遺跡・富山市（旧大沢野町）布尻遺跡など）。勾玉状のものとしては、朝日町下山新遺跡のものが注目される。これは中期の可能性が高い。そのほか、砺波市（旧庄川町）松原遺跡では粘板岩の小扁平礫に穿孔した垂飾品が出土している。

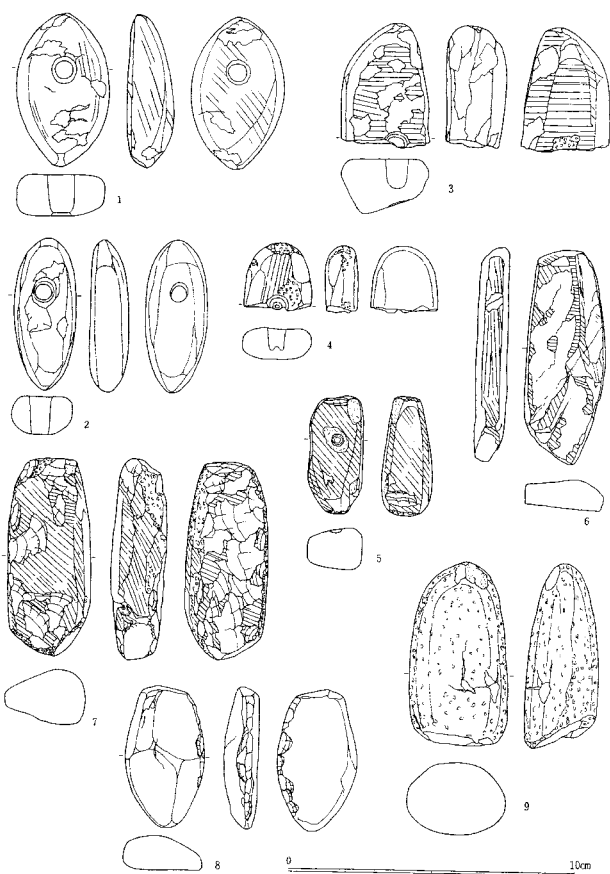
3. 後期・晩期

後期になるとヒスイの太珠は小型化し、中葉以降は垂玉類、丸玉類などと変わらない大きさになるものと考えられる。垂飾品は様々な形態のものが生み出される。代表的な遺跡として、朝日町境A遺跡や、富山市（旧大沢野町）布尻遺跡、小矢部市桜町遺跡などがある。なかでも境A遺跡は、ヒスイ、蛇紋岩、滑石などを材料に、勾玉・管玉・指輪状・垂玉・丸玉などの各種玉類とともに蛇紋岩製磨製石斧を大量生産し全国各地に流通させている。この遺跡の玉類・磨製石斧生産活動は晩期まで続くと考えられる。

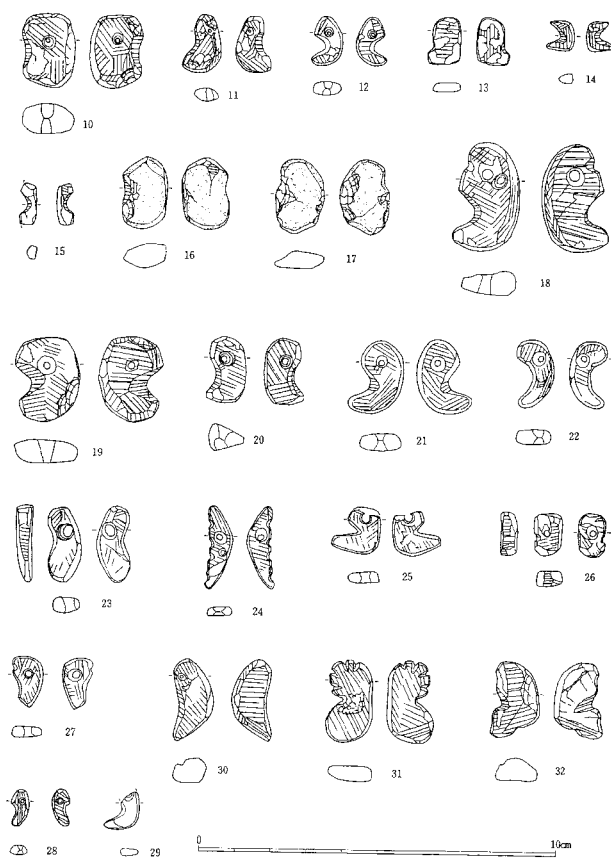
勾玉や丸玉は連珠状にして、首輪や腕輪にしたものであろう。東北や北海道では墓穴から副葬品としてまとまって出土する例が多く見られるが、富山県内ではまだ発見されていない。時期的には晩期に下るものが多いと考えられる。なお後期・晩期における装身具類の分類と時期区分や消長の確認なども、細かな時期比定の難しい資料が多いため、充分とはいえない。



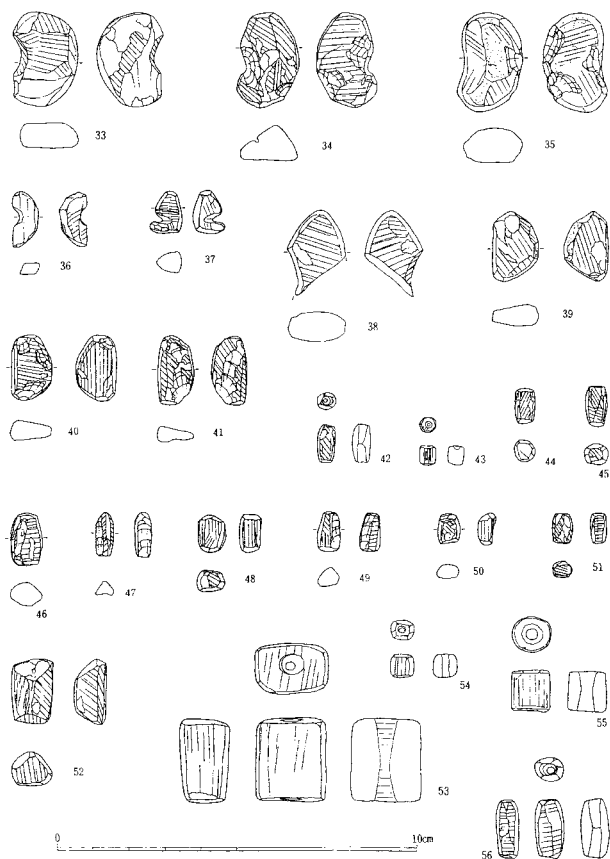
第1図 石製装身具の変遷



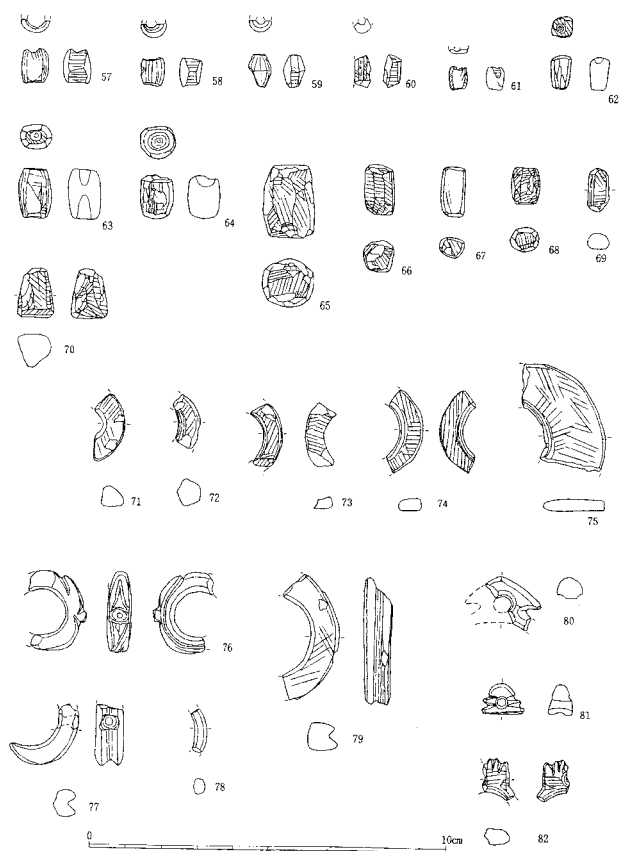
玉器実測図1
(1~9は硬玉製)



玉器実測図2
(10~17は硬玉製)



玉器実測図3
(42~52は硬玉製)



玉器実測図4

第2図 境A遺跡の玉類